

令和6年度 小学校複式学級用

**「新編 新しい国語」
指導計画作成資料
解説編**

東京書籍

これからの国語教育と複式指導

1. これからの国語教育

2020年度から全面的にスタートした教育課程、学習指導要領は、加速度的に進展する社会の変化に対応した新しい時代の教育の在り方を指し示している。指導計画は、当然その路線をしっかり踏まえたものでなくてはならない。形式的なものではなく、教育課程改訂の意図を十分生かした計画を立てて実施するよう努めなければならない。

今教育課程は、教育基本法が目指す教育の目的に基づき、変化の激しい社会を生きるために必要な力である「生きる力」を育むことを重視している。このため、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、以下の三つの柱に整理した。

- ・生きて働く「知識・技能」
- ・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」
- ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」

さらに、児童・生徒がこれらの資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の推進が求められている。そして、深い学びの鍵として、各教科等の「見方・考え方」（国語科においては「言葉による見方・考え方」）を働かせることが必要であることを示している。また、令和3年中教審答申では「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が提言された。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが示されている。これらのことが意味しているものは、教師からの一方的な伝達の授業からの脱却を図り、児童自らが学ぶという姿が見られる授業を構築すべきだということであろう。複式教育においても、児童の学びが見られるものを目指すという点では一致している。

そして、現在の学習指導要領において示されて

いる国語科の主な内容は以下のとおりである。

(1) 目標及び内容の構成

国語科で育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理するとともに、従来領域ごとに示していた学年の目標も、同様に三つの柱で整理した。

また、従来3領域1事項で構成していた内容を、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕に構成し直し、〔思考力、判断力、表現力等〕を3領域の指導事項と言語活動例で構成した。

(2) 学習内容の改善・充実

〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕の各指導事項について、育成する資質・能力が明確となるように改善した。

(3) 学習の系統性の重視

小・中学校を通じて、〔知識及び技能〕の指導事項及び〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項と言語活動例のそれぞれにおいて、重点を置くべき指導内容を明確にし、系統化した。

(4) 授業改善のための言語活動の創意工夫

〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、指導事項と言語活動例の関係を明確にするとともに、各学校の創意工夫により授業改善が行われるようにする観点から、従来示していた言語活動例を言語活動の種類ごとにまとめた形で示した。

(5) 読書指導の改善・工夫

〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置づけるとともに、「読むこと」の領域では、学校図書館などを利用してさまざまな本などから情報を得て活用する言語活動例を示した。

学習指導要領の国語科の目標および内容は、こうした教育課程全体のねらいや国語科改善の基本方針に沿って定められ、その趣旨の具体化を図ったものである。

2. 複式学級における学習指導の特色

複式学級とは、少人数であるため、複数学年による学級集団が形成されるものである。複式学級においては、複数学年の児童を一人の教師によって同時に指導しなければならない。したがって、教育課程や教科の目標・内容・方法上、単式学級とは異なることがあるのは当然である。学年が異なるため、能力、学ぶ力、体力等において差があり、複式学級独自の指導計画を作成しなければならない。

複式学級の特色として、

- (1) 学年差と同時に、児童の経験や能力の差が見られる場合があること。
- (2) 小規模人数学級（小集団）であること。
- (3) へき地に存在することが多いこと。

などが挙げられる。こうした特色や条件は、学習を進めていくうえで大切な要因となっている。

今後も、出生者数の減少に伴い、児童・生徒数の減少が予想されることから、複式学級を有する小規模校が増加することが考えられる。学年差や能力差を生かし、小規模校であるがゆえにできる学習指導、複式学級であるがゆえにできる学習指導の工夫や改善が求められることになる。

3. 複式学級における指導形態

例えば完全複式では、2個学年の指導をするために、直接指導と間接指導を交互に繰り返す「わたり」の時間的・空間的な指導が必要となってくる。

一般的に単位時間を

〈間接指導→直接指導→間接指導〉

〈直接指導→間接指導→直接指導〉

と、これまでの多くは、教師が二つの学年を「わたり」ながら、二つの学年を交互に指導する形態で授業が展開されてきた。

しかし、1時間の授業の中で、機械的に直接・間接の指導を行うのではなく、あくまでも児童の主体的な学習がされているかどうかには視点を当て、児童の意識の流れに沿った学習を成立させなければならない。児童にとっては、直接も間接もないはずである。

また、「わたり」で児童の思考過程が途切れることがないように、間接指導のための直接指導、

直接指導のための間接指導となるような学習指導を行う必要がある。

直接指導は、単式学級の指導法と重なるが、複式学級においては極めて時間が制約されているため、効率的かつ有効な指導の工夫が要求される。

間接指導は、児童の自力解決の場であり、また、児童どうしが教師の指示に頼らず自ら活動を行う場である。そのため、いかに一人学びや、とも学びなど児童どうしの関わり合いの中で学習を進めることができるかが鍵となろう。日頃から、自ら学ぶ力や学び方を身につけさせるようにしたい。特に、調べ方、整理の方法、まとめの仕方、意見や考えの表現法、何をどのようにして解決していけばよいのかなど、具体的な一人学びの方法を身につけさせるようにすべきである。

これから要求される「生きる力」は主体的に問題解決できる力であり、自らの言語体験を通して培われる力である。

このように考えると、今後の複式学級の指導においては、間接指導をいかに計画的に継続的に工夫・改善するか、自ら学ぶ力をいかにして育てていくかが最も大きな課題となってくる。そして、授業を児童が「生きる力」を培う場とするためには、次の二つの点において工夫が求められる。

その一つは、同領域指導である。これは、複式学級において、それぞれの学年に共通する目標の下に領域を設け、共通の話題や教材を取り上げて、同時に学習を進めようとするものである。教科書においては、異学年間でもなるべく同じ時期に、例えば「読むこと」や「書くこと」などの領域が位置づくよう配列されている。同領域の学習指導の実施に生かしたい。

もう一つは、学年別にそれぞれ指導計画を立てて、目標も教材も異なった指導をする。こうした両学年別個の領域の構成で指導する方法を異領域指導と呼ぶ。以下、同領域指導と異領域指導について解説する。

(1) 同領域学習指導

2個学年に共通する同じような目標のもとに領域を設け、なるべく共通の話題や教材を取り上げて、同時に学習を進め、学習指導の効率を上げようとする指導方法である。これは、共通の学習活動をできるだけ多くして、直接指導の充実を図るとともに、2個学年内での交流を図ろうとする

ものである。

この指導法方には、次のような長所（○）、短所（●）がある。

- 指導計画作成が一元的になり、教材研究、指導の準備等、学習指導の能率を高めることができる。
 - 共通の目標のもとに学習が進められ、協力して学習することができ、好ましい人間関係が作られ、児童の人間形成にも役立つようになる。
 - 下の学年の学習内容を上の学年が行うことで、反復練習を行う機会が得られる。
 - 直接指導の機会が多くなり、指導を徹底することができる。
- しかしその一方で、
- 上学年の児童の学習能力が、下学年の児童の学習能力と比べて極端に劣る場合、同じ学習を行うことで上学年の児童が劣等感を抱く恐れがある。
 - それぞれの児童の発達の段階の違いへの配慮を怠ると、教え込みといった教師主導の学習になりがちになる。

といった留意すべき点もある。

同領域指導においては、

- ☆ 国語の能力と、学習に対する興味・関心など、児童の実態把握に努めること。
- ☆ 学習の系統を意識しておくこと。

等々、児童と教材の把握に努め、指導目標、内容等を吟味しなくてはならない。そしてこの場合、同領域異教材構成と同領域同教材構成との二つの指導方法が考えられる。

① 同領域異教材指導（わたりの活用）

2個学年の学習内容が、例えば、物語の読解で共通しているが、扱う教材が異なる場合の指導を指す。2個学年に共通する目標を設定して、異なる教材を用いて指導していく。通常、複式学級においては、この指導が一般的と思われる。

同一の領域として主目標は同じであり、学習活動も共通する部分がある。しかし、学年ごとに主となる教材が異なるため、間接指導が行われる。

教科書を使用する場合は、同領域異教材で計画することは自然であろう。ときには、教科書の指導時期が異なっても、それらを組み合わせることで同領域で構成することが可能である。その場合、

なるべく教材の間に関連する点や共通する点を見つけ、両学年に共通する目標と学年間の能力差に応じた目標を設定して、同一領域を構成することが大切である。

しかし、効率的な指導を行うため、学年独自の目標や指導事項の達成をおろそかにしたり、共通目標が抽象的なものになったりしないよう、十分留意しなければならない。

② 同領域同教材指導（わたりなし）

いわゆる単式指導と同じであるが、指導にあたっては、同じ教材を用いて同じ目標を掲げ、能力差、学年差に応じた取り扱いをすることを指す。

同領域同教材で指導する場合、教材の準備や指導方法等、教師の活動は一元的になり、指導の過程においても、学級にまとまった学習の雰囲気生まれ、共通の意識が高まり、活動も活発になって指導の効果が上がることになる。

しかし、次のようなことに、特に留意しなければならない。

- ☆ 児童の経験や能力の差などを、学年差ではなく、能力差として捉えること。特に漢字や語句の指導、課題の出し方、学習のてびき等、単式学級よりも能力差に対する配慮をきめ細かにすること。
- ☆ 二つの学年の下位学年生に学習負担が生じないよう配慮をすること。
- ☆ 各学年の発達の関連や系統を明らかにしておくこと。 等

(2) 異領域学習指導（学年別指導）

複式学級の2個学年が、独自に学習を進める指導方法である。例えば、1年が物語教材の内容を読解しているとき、2年は説明文の導入の話し合いをするというように、それぞれが別々の学習を進める指導方法である。

この指導法方には、次のような長所（○）、短所（●）がある。

- 各学年の目標を、発達段階や児童の実態に合わせて設定できる。
 - 学年ごとの学習を行うことで、系統立てた学習内容の充実を図ることができる。
- しかしその一方で、
- 指導計画の作成、教材の研究、資料、教具の準備等を学年別にしなければならないため、教

師の負担が増える。

- 間接・直接指導の組み合わせが複雑で、教師の配慮や活動で、「わたり」を用いた特別な配慮が必要となる。
 - 各学年の学習活動が全く異なるため、児童によっては、他方の学習へ気をとられるなど、学習に集中できなくなることがある。
 - 学年の人数が少ないため、問題解決において、学習を広めたり深めたりすることが難しい。
- 等々、さまざまな学習指導上の問題がある。
- 異領域学習指導においては、
- ☆ それぞれの学年での学習活動において、児童が何をするのか、何のためにするのかといった方法や目的の明確化を図る。
 - ☆ 児童が学習に集中できるような「学び方」の指導を行い、学習の進め方を児童自身が分かるような約束を作る。
- といったことに留意しておく必要がある。

4. 国語科の複式指導の留意点

現在、児童・生徒に「生きる力」を育てるために、さまざまな教育の改革が進められている。

へき地および複式学級でも、少人数や能力差の問題、変則複式や変動複式の発生、また、少人数に起因する表現力、多面的な思考訓練の問題、一人学習、話し合い学習や集団活動の設定の問題等々、教育課程の編成、指導計画の作成、学習形態や指導方法など、工夫を要する課題が山積している。

さらに、小規模校や複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の創意工夫も求められる。

以下、複式学級の国語科指導にあたっての留意点を考えてみる。

(1) 語彙を豊かにする

表現が豊かになるよう、計画的、継続的な指導をする。特に、自分の経験や考えを人前で自由に発表することに慣れさせることを大切にしたい。

少人数の複式学級に育つ児童の表現力を豊かに伸ばすことは容易なことではないが、日常生活や学校生活において話すことの場面を想定し、その場面に応じた話し方を、意図的、計画的に徹底

して指導し、好ましい言葉の使い方ができるようにしたい。

(2) 読む力を高める

多読することは、語彙を増し、思考力を培い、「話す・聞く力」や「書く力」を培うことにも貢献する。学校図書館や学級文庫の充実を積極的に進めたい。意図的に並行読書を取り入れるなど、児童が必要な本を自ら選んで主体的に「読む力」を育てたい。

(3) 書く力を高める

学習の振り返りやまとめを書くことは、学びを深める手立ての一つとなる。書く内容については、授業の感想ではなく、「何をどのように学んだか」「新しく学んだことは何か」「分かったことや疑問に思ったこと」などを書けるようにしたい。

(4) 目標や方法を明確にして学習を進める

単元の指導、1時間の指導で、

- 学習の目標をより焦点化し、何をするのか、児童にねらいがしっかり受け止められていること。
- そのために、どのような学び方をするのか、学習の進め方が分かっていること。

複式学級での間接指導は、準備のための調べる学習だけでなく、直接指導につながる事が重要であり、児童自身の自主的、効率的な生きた学習を促すよう工夫したい。

(5) 1時間完結型の授業

前時の学習を確認（復習、想起）して本時の学習に入りたいという思いが強くなり、いつのまにか導入が長くなることもある。そうすることで、一人学びやとも学びの時間が十分に確保できなくなる場合がある。また、とも学びで課題解決に迫ったときに時間が来てしまい、まとめができないまま授業が終わってしまうこともある。

そこで、導入からまとめ、振り返りまでの時間配分を細やかに記入したカード等を用意し、黒板などに掲示する。授業者と児童が共有することで、時間を意識して学習を進めることができる。限られた時間を最大限に有効に活用して、1時間完結型の授業を目指したい。

(6) 学習リーダーを育てる

学習リーダー（間接指導時の進行役）を活用した授業は、児童が主体的に学習活動を展開するための手立ての一つとなる。ここで大切なことは、学習リーダーが司会的な役割にならないように、基本となる「学習リーダーの手引き」を作成するなどの工夫をすることである。リーダーの役割を明確にし、児童に、自分たちで問題解決をしていくという実感を持たせたい。併せて、直接指導にリンクした間接指導につなげていきたい。

(7) 一人学びからとも学びへ

複式学級では、児童どうしの関わり合いの中で学習を進める一人学びやとも学びが重要となる。前時までの学習や本時の学習の見通しをもとにしながら、自力解決をするよう促す。

一人学びをとも学びに広げる方法として、自分のノートを見せながら説明する活動がある。こうした共有の場で積極的にICTを活用していく。

とも学びを充実させるため、一人学びがしっかりとできるよう、具体的な学びの方法を身につけさせたい。

令和6年度版教科書は、学習に役立つQRコンテンツが豊富に用意されている。単元の最初のページからは、それまでの学習で学んだことを児童自ら確認することができるようになっている。説明文単元では内容に関する動画が、「話すこと・聞くこと」単元ではインタビューの音声データや話す児童のモデルとなる動画を視聴できるようになっている。これらコンテンツの充実は、自ら教科書を使いこなし、必要な情報を得て学習に臨む姿を期待したものである。また、ICTの活用は資料としての役割だけではない。自ら学ぶ姿を撮影し、それを自分自身で見直すといった自己評価にも活用できる。これまで教師がついて評価していたことが、児童だけで評価ができる環境が整えられつつあるのである。

こうした学習の環境の整備に伴い、複式の学級の授業の困難さばかりに目を向けるのではなく、単式学級においてはできない学習方法の開発に取り組むべきだと考える。

異学年がいっしょの教室にいるということを、自分たちの発表を聞いてくれる相手がそばにいると捉えると、複式学級のよさとして浮かび上が

ってくる。また、人数が少ないということは、教師が一人一人を見て評価ができる環境であり、また、一人一人が活躍する出番が多いとも捉え直すことができる。

複式学級には確かに困難さもあるが、一方で、単式学級にはないよさも確かにある。

上の写真は、4月に1年生に読み聞かせをする2年生の姿を撮影したものである。ひらがなを読むことがまだ難しい1年生も、2年生がついて読み聞かせをしてくれるからこそ、文字に興味を持ち、自分たちも読みたいという意欲を持つようになるのである。



また、複式だからこそ、教師がいなくても自分たちで学習を進めるようになっていく。下の写真は、児童がミニ先生になって問題を出して、それに対して挙手をしているところである。



また、習ったばかりのひらがなを空書きし、問題を出しているところである。どちらも5月の1年生の姿である。このように複式学級は自分たちで学ぶ機会に恵まれた環境なのである。



5. 本資料作成の趣旨について

本資料は、1・2年、3・4年、5・6年の、いわゆる「完全複式」をひとまずの前提としている。

しかし、それだけではなく、2・3年学級、4・5年学級での国語科指導についても指導計画を示すようにした。それは、今日、学校経営の多様化や学年ごとの児童数が異なることなどの事情により、必ずしも完全複式ではない学級（2・3年複式、4・5年複式）が存在しているからである。

この場合、指導時数が学年で異なるという問題が起こってくる（※国語科の授業時数は、低学年が週9時間、中学年が週7時間、高学年が週5時間）。実際の2・3年学級などでは、その時間数の違いは、他教科等との組み合わせや、週ごとの教科のまとめ取りなど、学校独自の編成によって解消している。

そこで、本資料の指導計画編においては、単元の配当時数を一つの目安として考え、原則として単式指導の場合の時数をそのまま示すこととし、各校の実情に応じた運用ができるようにした。

そして、本資料においては、教科書の単元・教材の配列を意識し、同領域指導を基本にしつつ、目標の達成や教材の特質の面から特に必要と思われる場合には、異領域指導を用いた年間指導計画を作成した。

教科書では、1年上巻を除き、例えば、「読むこと」、「書くこと」などの領域をほぼ同じ時期に配列する構成をとっている。そのため、なるべく教科書の順序に沿って実施する複式指導計画作成を目指したのである。

年間指導計画編では、同領域異教材で「わたり」を行う指導を「Ⅰ」、同領域異教材で一部一斉を行う指導を「Ⅱ」、同領域同教材を「Ⅲ」と表示し、異領域異教材などⅠ～Ⅲのどれにもあてはまらない指導を「Ⅳ」と表示した。

「Ⅰ」は、例えば、両学年とも物語を読むことを中心としたねらいとしているが、学習する内容が異なる場合であり、「わたり」を多く行うようになる。

「Ⅱ」は、例えば「スピーチをしよう」などの活動単位において、その話題を2個学年の教科書から選択するといったことや、両学年の物語教材

の両方を「比べ読み」をするといった、両学年がいっしょに学習する場を増やす指導法であり、一部「わたり」を取り入れる。そうすることで、単式学級では行うことが難しい、複式学級独自の指導計画作成ができるのではと考えた。

「Ⅲ」は、2個学年が同じ単元・教材で学習をし、基本的に「わたり」を行わない場合である。「書くこと」「話すこと・聞くこと」単元では、二つの学年に示されているテーマのいずれかのものを選択して学習するという場合がある。こうした場合は、「Ⅲ」として、同領域同内容として実施するよう指導計画で示すようにした。

複式学級において「わたり」をどのように行うのかは、指導する教師にとってたいへん難しい課題である。そのためかつては、「わたり」を減らそうと、両学年の教科書教材・補助教材も含めてA年度、B年度に振り分け、A年度計画、B年度計画を作成し交互に実施することも行われていた。しかしながら、今日においては、転校する児童への配慮や、先に述べた流動的な学級編成といった事情から、AB年度方式による指導の実施は現実的ではないという声が、学校現場からあがってきている。そこで、教科書の教材は基本的には、各学年の内容はその学年において取り扱い、児童の実態や教材の内容において、2個学年がいっしょに学習を行うことが望ましい場合は、同領域同教材指導を取り入れていくという基本方針を立て、指導計画を作成することとしたのである。

※ 本資料の基本的な考え方は

- 教科書の単元、領域の配列を、なるべく生かす。
ただ、時間数の調節や、内容面でいっしょに実施したほうが効果的だと考えられるものについては、一部入れ替えを行っている。
- A・B年度方式はとらない。
- 配当時数は目安とし、原則として単式の指導計画と同じ時数を示す。
ただ、単元の配列と同様、2学年の学習をそろえるなどの理由で一部調整を行う場合もある。
- 基本案は、同領域指導案とする。
- 同領域指導案は、Ⅰ案～Ⅲ案で構成する。
 - 「Ⅰ」…（異教材で「わたり」を行う扱い）
二つの学年の学習内容が、例えば、物語の読解で共通しているが、扱う教材・学習材が異なる場合の指導。
 - 「Ⅱ」…（異教材で一部一斉指導を行う扱い）
教材の扱いや学習活動を工夫して、一部二つの学年がいっしょに学習する場を設け一斉指導を行う場合の指導。
 - 「Ⅲ」…（同教材で「わたり」を行わない扱い）
いわゆる単式指導と同じであるが、指導にあたっては、同じ教材を用いて同じ目標を掲げ、能力差、学年差に応じた取り扱いをする指導。
ただし、1年生の1学期は、異単元指導を基本とする。
- 指導内容や児童の実態に即して、特に必要または効果的と考えられる場合、異領域指導案「Ⅳ」を示す。

指導計画作成にあたっては、年度当初に児童や学校の実態を分析し、どの形態が最も適当であり、どう組み合わせるとより効果的な指導がなされるかを十分検討し、児童に最もふさわしい指導計画が作成されるようにしたい。